

ナショナルオープンに相応しいコースセッティングとは クラブの熱意とコース管理の努力が ナショナルオープンを成功に導く



今年の日本オープンが狭山ゴルフクラブで開催された。選手たちの華やかなプレーを引き出した美しいコースは、どのようにつくられ、どのように維持管理されたのだろうか。コースセッティングの裏側を、菅真知JGAコースセッティングチーフディレクターと、狭山GC・大和田弘之スーパーバイザー兼グリーンキーパーにうかがった。

長いラフを作り出すために苦労の連続

——まず、今年の日本オープン開催コースが、狭山ゴルフクラブに決まった経緯からお聞かせください。

菅真知チーフディレクター（以下、菅） 狭山GCは、過去にダイヤモンドカップ（2002年、2006年、2010年）や日本シニアオープン（2008年）を開催しています。その都度コースを改修し、徐々に大きな大会を開催できるコースになってきているという印象は持っていました。そこで私のほうから「日本女子オープンを開催しませんか」とお声がけしたのです。4年ほど前でしたね。でも、クラブは「どうせやるならナショナルオープンをやりたい」というお話でした。日本オープン開催のためにはコースだけでなく、ギャラリーの収容力や駐車場の収容台数など、数多くの条件があります。それをクリアするのは大変なのですが、クラブの皆さんの努力ですべて埋めていってもらったという形です。

大和田弘之グリーンキーパー（以下、大和田） 最初で開催基準を見たときは、これは大変だなと思いました。間に合うかどうか心配でしたよ。コース管理として大変だったのは、やっぱりラフですね。私はダ

イヤモンドカップを経験させていただいたのですが、あれは春先の大会だったので、ラフはまったくケアしなかったのです。今大会は秋の開催で、ラフは100ミリだったり120ミリだったり、通常営業時の3倍です。JGAからのオーダーにどう応えればいいのかと悩みました。

菅 ラフはその年に伸ばせばいいというものではなく、前年から肥培管理などをしっかりやらないと伸びないものなんですよ。もちろん、グリーンもフェアウェイも同じですけどね。

大和田 その通りです。芝の管理は本当に大変です。それに今大会では、フェアウェイをできるだけ低く刈りたかったので、普段は春先に1回しかやらない目砂を梅雨明けにもう1回、8～9月にかけてさらに1回と、計3回もやって芝の低刈りをキープするという方法をとりました。通常とは違った作業が入ってきて苦労しました。

——今年は天候が不順だったので、キーパーとしては苦労されたのではないですか？

大和田 そうですね。今年は9月に雨が続き、刈り込み作業がほとんどできなかったのです。ラフも刈れ

なかったし、日照不足でベント芝のグリーン、高麗芝のフェアウェイ、野芝のラフのすべてで生育不良という箇所がかなりありました。水やりや肥培管理はどうかコントロールできますが、日照だけはどうにもなりませんからね。

菅 試合前は芝の色の心配をしました。でも、大会直前にパッと日が照ってくれて、どうにか見映えもよくなってきましたね。

——ラフを長く伸ばすというのは難しい作業なのでしょうか？

大和田 そうですね。まずは芝が立つように、芝自体を強く育てることが必要です。そして、機械的に芝を起こして刈ることも求められます。とはいえ、ギャラリーなどに踏まれると寝てしまいますので、芝が寝てしまっているところに関しては大会中も毎朝人力で芝を起こす作業をしました。

菅 今年は雨が多かったから芝が伸びて寝てしまって、その上にボールが乗るような状況になっていました。試合直前までその芝を刈り、立たせる作業をして、上からボールがスポッと入るようなラフにしたのですから、大変な苦労だったと思います。



大会開催記念の、出場選手サイン寄せ書きの前に立つ狭山GCの大和田弘之スーパーバイザー兼グリーンキーパー（左）と菅真知JGAコースセッティングチーフディレクター



「今大会の成功の大きな要因の一つは、クラブ側がJGAのリクエストに最大限応えてくれたこと。本当にありがたかった」と、菅チーフディレクター

4年にわたって大幅なコース改修を敢行

——ここで改めて、今大会のコースセッティングの基本コンセプトを教えてください。

菅 ナショナルオープン、すなわち日本一の大会にふさわしいセッティングということが一番に挙げられます。つまり、グローバルな試合に通用するセッティング、世界基準のセッティングということになります。これは、そのときに一番強い選手が勝てる公平なセッティングかどうかということが問われます。JGAのコースセッティングは、ここ数年で変化してきています。かつては選手のスコアを抑えつけるようなひたすら難しいセッティングが多かったのですが、近年は選手の技術を引き出す、チャレンジングなセッティングになっています。今大会も、選手の挑戦意欲をかきたてるセッティングを目指しました。

——そのコンセプトに基づき、4年前からコース改修に着手したわけですね。

大和田 まずはギャラリーの動線も考慮しながら林帯整備を行いました。樹木の下枝を下ろしたり、間伐したり。元々樹木が多かったので林の中に日が当たらず、芝が生えない裸地が多かったのです。そこに日が当たるようにして、裸地の上に芝を貼る作業をしました。1000本以上は樹木を切ったと思います。そして芝を貼った場所だけで6万平米はあります。

菅 同時進行でティーインググラウンドの整備もお願いしましたね。日本のゴルフ場のティーインググラウンドは後ろになるほど高くなることが多いのですが、狭山GCはコース自体がとてもフラットだということが大きな特徴です。そこに打ち下ろしてみたいなティーインググラウンドがあったらおかしいですよ。そこで後ろのティーインググラウンドの段差を低くし、同時に大勢のギャラリーから見やすくするために広くしたのです。ティーインググラウンドを整備したのは全部で12ホールになりましたが、距離を伸ばしたホールはほとんどありません。

——そのようなコース改修業務は、キーパーはじめスタッフにとって大変な作業だったでしょうね。

大和田 そうですね。この4年間は通常作業に加え、日本オープンのための作業があって本当に忙しかったです。トップシーズンはフェアウェイの芝刈りが週に3回は必要だし、ラフだって刈らなければいけません。その作業にスタッフを何人もとられるわけですから、林帯の整備などにはなかなか時間を割けないですよ。

菅 コース管理の現場というのは本当に忙しいんですよ。一日放っておくだけで芝はどんどん伸びますから。結局、コース改修に力を入れられるのは、芝の生育が遅くなる冬の時期なんですね。スタッフの皆さんが少しホッとできる冬の時期なのに、本当に大変なご苦労をおかけしました。感謝しています。

今大会で取り組んだ新たな試みとは

——今大会では新しい試みとして、フェアウェイの端からラフまでの芝を徐々に高くしていく「ベベルカット」が採用されました。狙いは？

菅 私がメリオンGCで開催された全米オープン(2013年)を視察に行ったとき、USGAが初めてベベルカットを採用しました。狭山GCの皆さんとその話をしているなかで「日本オープンでもやってみないか」ということになったのです。ラフを100~120ミリの高さにしたときに、フェアウェイとラフの境目でボールが長いラフに寄りかかると同時に止まるとちょっと打てません。ベベルカットにしてラフを徐々に高くしていけば、わずかに曲げた選手はやさしい状況から打てる。逆に大きく曲げた選手は深いラフからのショットになる。差がはっきりと出て不公平感はないのでは、という狙いです。

大和田 我々スタッフにとっても初めての試みでした。芝刈り機の歯の枚数や硬さ、回転数などをいろいろ変えて試行錯誤しましたよ。現在、芝を斜めに刈れる機械はないので、最終的には既存のものを少し改造してクリアすることができました。

菅 今大会では、バンカーを避けた選手のボールが入るところなど6ホールに導入しました。試みは成功だったとは思いますが、テレビ中継では見た目にはわかりにくかったかもしれませんね。



今年は日照不足で、例年以上に芝の育成管理が難しかったという。しかし、大会期間中もスタッフの献身的なメンテナンス作業が行われ、最高の状態に保たれた

大和田 日本の野芝と海外の洋芝の違いだと思います。色味の問題かなと。

菅 高麗芝のラフだったら、全然違って見えたかもしれませんね。

——グリーンに関してはいかがですか？

大和田 今年はとにかく日照不足だったもので、スピードはなんとか目標まで出せましたが、コンパクションは上がりきらなかったです。ローラーでもかければ表面的には硬くはできますが、土壌の中にしっかり芝が根を張らないとコンパクションは上がりません。表面的な硬さだけでは、スピンのほどけたりするのです。止まって速いグリーンが理想ですから、今年はなかなか難しかったです。

菅 でも、選手は「こんなにきれいに転がるグリーンは久しぶりだ」と言っていましたよ。今年は日本全国で天候が悪かったですから、どこのコースもコンディション維持が難しかったのだと思います。みんな口々にほめていました。

大和田 こちらとしては、もっとよくなったはずだと思っていますけどね。内心はハラハラでした(笑)。

——今大会のコースセッティングを振り返り、どのような感想をお持ちですか？

菅 今大会成功の一番の要因は、私たちJGAがこうしたいと思ったこと以上にクラブ側が応えてくれたことだと思います。非常に多くの林帯やティーインググラウンド、バンカーなどを整備しましたが、これはクラブの理事長やコース委員長、総支配人をはじめクラブの皆さんに、素晴らしい大会にしたいという熱い思いがあったからです。ましてや現場は、より大変な思いをされたと思います。やはりクラブ側の意欲が大会を成功に導くのだと思います。



「日本オープンのコース管理などは、やりたくてもやれない仕事。本当に貴重な経験をさせていただきました」と、大和田グリーンキーパー

大和田 私たちは、いいコースにしたいということだけを考えていました。どこのキーパーが見に来るかわからないですから(笑)。一般のギャラリーが見えないようなところも、絶対に手を抜けないと思って整備しました。

菅 試合を見ないで、コース管理の動きをじっと見ている人もいましたね。あれは絶対に同業者ですよ(笑)。日本オープンも、キーパーのオープンでもあるのです。

大和田 日本にこれだけ多くのゴルフ場があるなかで、日本オープンなどという大会はやりたくてもやれないキーパーがたくさんいるわけです。それだけに、私やうちのスタッフにとっても貴重な経験になりました。

菅 スタッフの一つ一つの作業レベルが、試合前と比べてずいぶん高くなっているはずですよ。今後のコース管理も少しずつ変化して、ますます素晴らしいコースになっていくでしょうね。